

## ドイツ的フマニズムスと

### ヴィルヘルム・フォン・フンボルト

——フンボルト言語哲学の背景——

梶 嘉一郎

#### I

フンボルト W. v. Humboldt の後継者をもってみずから任じていたシュタインタール H. Steintal は、彼の『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語学的著作』Die sprachwissenschaftlichen Werke Wilhelm's von Humboldt の序説において、人間性 Humanität こそがフンボルト言語哲学 Sprachphilosophie の母であり、彼の言語哲学は人間性のもつとも美わしい娘であるといっている。<sup>(1)</sup> シュタインタールをしてこういわしめたフンボルトの言語哲学は、たしかにたんなる言語の理論的研究ではなく、言語の全体とその根底を、人間存在に相即してつきとめること——したがって言語の哲学的考察——にあつたといえよう。そこで当然に言語そのものの研究とともに、その言語を駆使する人間への研究が予想されねばならない。事実、彼の学問的業績を年代史的に考察しても、それは人間の研究

にはじまつて言語の研究でもって終りをつけているのである。このことはまた「人間は言語によつてはじめて人間である。しかしその言語を考察するには、すでにまず人間でなくてはならない」という彼自身の言葉によつても、端的に証明されることである。

フンボルトの言語研究は、このようにしてまさしく彼の人間研究、とりわけその人間性の概念と相即しておこなわれたものである。そこでフンボルトの言語哲学を考察しようとするこの論文は、順序としてまず、彼の人間性に対する見解を解明しなければならぬであろう。ところで彼の人間性に対する見解を明らかにするには、その根拠となつたドイツ的フマニズム *deutscher Humanismus* と、そこから発展した彼の陶冶理想 *Bildungsideal*<sup>(4)</sup> の解明が、もつとも適切であるからして、この小論においては右の二点に焦点をあてて論述することとする。

註(1) Heymann Steinthal (1823-99) は言語学者、心理学者。フンボルトの言語の内部形式の考えを發展させ、言語学と心理学

との関連を究明した。C. Menze によれば、それだけにまた彼は、フンボルト的な思索の根本である人間学的な基礎を軽視したと云ふ。C. Menze, W. v. Humboldts Lehre und Bild von Menschen (1965) S. 13

(2) ここでは、その対象を可能なかぎりにおいて、全体的にしかも根源的に究明することを意味する。

(3) H. v. A. Leitzmann, W. v. Humboldts Gesammelte Schriften, Berlin, (1905), 4, S. 15. (Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung), (1820).

(4) フンボルトにおける *Bildung* の概念は多義的であつ重要である。その都度、時と場合によつて、「育成」「形成」「陶冶」「教育」「教養」「文化」などの意味を持つ。彼によれば *Bildung* は本来的には、精神的倫理的な努力の知識及び感情から、調和的に感覚やその性格の上にそそがれるような性情をめざすことである。

## II

およそいかなる思想といえども、他の文化現象と同様に、それが成長・発展・衰頹の過程をたどり、やがてつぎにきたるべき新しい思想のもとへと発展的解消をとげることは、歴史における自明の理である。しかしまた一方、それが偉大なる思想であればあるだけ、つねに根強く歴史の底流にひそみ、時きたらばやがてあらたなる装のもとに、人類文化の方向を規定することもまた、過去の歴史があきらかに立証するところである。いまここでまず考究しようとするドイツ的フマニスムスもまた、そうした意味で、かのいわゆるルネッサンス的ヒューマニズムの再現であり、それが新人文主義 *der Neuhumanismus* といわれる所以のものでもある。ところでこのドイツ的フマニスムス＝新人文主義は、ルネッサンス以後、どのような経過をたどって、ドイツの地に開花したのであるうか。われわれはまずこのことについて概観してみたい。

周知のように、ヴィンケルマンからはじまって、レッシング、ヘルダー、ゲーテ、シラーにいたり、ここで考究しようとするフンボルトにおいてももつとも明瞭な様相を呈しつつ、さらにドイツロマン派を包含してヘーゲルに達する十八世紀のドイツ的フマニスムスは、実に複雑で多様な要素を有するものであり、これらの要素はまた歴史的にみても、さまざまの影響のもとに成立したものである。とりわけ、そうした影響の中では、国内的にはルッターの宗教改革とヤコブ・ベームなどの神秘主義が、国外的にはヴォルテールにはじまるフランス啓蒙主義やルソーの自然主義があげられるであろう。もつともこのヴォルテール、ラ・メトリーさらにはアンシクロペディストへとつづくフランス啓蒙主義が、あくまでも啓蒙的・合理主義的悟性をその拠点として、封建的なるものに立ち向ったのに対して、ルソーのそれが、そうした悟性もさることながら、むしろ感性的なるものの優位を主張したという点で、この両者は異った立

場に立つとみられるでもあろう。しかしいづれにしてもこのようなフランス啓蒙主義は、周知のように、ドイツにおける哲学上でのライプニッツの单子論 *Monadologie* や、カントによる理性の研究と相まって、人間の有する個人的なるものの尊厳性を高め、したがってまた、ドイツ的フマニズムを確立することに、大きな役割を果したのである。

ところでこのフランス啓蒙主義がドイツに流入したとき、具体的にはどのような形態をとって出現したのであろうか。われわれはまずつぎの言葉「フランス国民と国家との緊迫せる雰囲気の中で、何よりもまず、政治的社会的な革命への呼びかけとして理解され、また実際にその効力を発揮したものが、ドイツ的政治形態を有する市民性の温和な風土の中へ流入したときは、それがもっぱら内面的・精神的な人間を形成することへの呼びかけにかわったのであり、そこでの政治的社会的な状態は、それがこうした内面的精神的世界の形成に障害となるかぎりにおいてのみ、批判の対象となった<sup>(1)</sup>」という、リット *H. Litt* の言葉に耳をかたむけよう。事実、ドイツは中世以来の小国分裂がおさまらず、後にハイム *R. Hayn* をして啓蒙主義の国家と名付けさせたプロイセンも、その国王フリードリッヒ大王の歿後は生彩を欠き、当時のドイツ全土には、政治的無気力ともいふべきものが充満していたのである。したがってリットもいうごとく、フランスにおいて政治的社会的変革をもたらしたほどの威力あるフランス啓蒙主義も、こうしたドイツ的風土に入っては、そのエネルギーの方向を外面的なるものから内面的なるものへと、政治世界から精神世界への探究へと、転換せざるを得なかったのである。さきあげた数名の人たちは、いづれもみなこのような環境のもとで、当時のドイツ精神界に、なんらかの功績を残した人びとである。われわれはまず、理性によって当時の宗教を批判的に解明しようとしたレッシングから、その功績をかんとたんにたどってみよう。

彼は『賢者ナータン』*Nathan der Weise* において宗教的寛容 *religiöse Toleranz* と人間性とを解明し、信仰は宗教と民族を超えて人類愛に到達せねばならぬことを強調した。また彼は『人類の教育』*Die Erziehung des Men-*

schengeschlechts を著わし、ここでは個人の場合に教育であるところのものが、全人類の場合には啓示 Offenbarung であるとして、教育＝理性の立場から宗教の意義を生かしつつ、可能なかぎりにおいて理性と宗教との調和を見出そうとつとめたのであった。

ヴォルテールやレッシングなどの、いわば悟性中心の啓蒙主義に対して、いわゆる疾風怒濤時代 Sturm und Drang Zeit の感性的な立場を強調し、若きゲーテやシラーに大きな影響を与えたのはヘルダーであった。クルト・ロスマン K. Rossmann は、「ヘルダーは熱狂的で素朴な自然神学の説教者であり、その自然神学でもって、彼は啓蒙期の悟性的文化に背をむけたのである」と。すでにして彼の『オシアン論』 Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und Lieder alter Völker において、詩歌はいく度も訂正された学校の宿題に墮してしまつたと嘆き、若きゲーテに大きな感化を及ぼしたヘルダーは、その著作『人類歴史の哲学への諸理念』 Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit においては、一切の事物を生み出す法則があり、この法則がめざすものは各民族に共通の特徴であるところの人間性であると語つたのである。この人間性こそは後にまた、ゲーテ、シラーさらにはフンボルトが、それぞれに問題としたテーマであった。

偉大なるゲーテについては、われわれはただつぎの点のみを挙げるにとどめよう。すなわちゲーテが当時すでに伝統的人文主義として因習化し、硬化してしまつていたドイツ的フマニスムスを、あらたに救済し、人間そのものの有するあらゆる可能性と必然性との実現にその生涯をかけたということである。このことは、彼のいわゆる「第二期のゲーテ」および「晩年のゲーテ」における多彩な活動とそのおびただしい成果によって、完全に証明されるのである。文学者であるとともに科学者でもあり、政治家であるとともに教育者でもあり、観照の人であるとともに行動の人でもあつたゲーテ。われわれはこうした全人的調和的な彼の性格とその活動の中に、ゲーテ的人間の本質をみる

のであるが、なおここでいま一つ注目したいことは、彼がそうした活動そのものの成果よりはむしろ、その過程を重視したことである。「すべて過ぎ行くものは一つの象徴にすぎない」<sup>(4)</sup> Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis と語ったゲーテは、それゆえにこそ、そうした過ぎ行く過程そのものを重んじたのである。たとえばこれに関連して、彼はエッカーマンに対し、人間についてつぎのように語るのである。「人間は通り抜けねばならない、いろいろの段階を持っている。そして各段階は、それに特有の長所と短所とを持っているがそれらは、それらのあらわれてくる時期においては全く自然的だとみなされねばならず、またある程度までそれは正当である。つぎの段階において彼は再び別人となり、以前の長所や短所は跡方もなく消滅してしまう。しかしまた他の作法や無作法がそのかわりにあらわれてくる。このように進んで最後の変化に達するが、この変化でわれわれがどうなるのか、われわれはまだこれを知らない<sup>(5)</sup>」と。すなわちゲーテにとっては、人間性完成のためには、いかなる休息もあり得なかったのであり、その生涯はそれがための休みなき努力の連続であったといえるのである。

ゲーテと同じくヴァイマルに住み、ゲーテとの変らざる友情のもとに『人類の美的教育に関する書簡』Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefenをはじめ、『群盗』Räuber その他の偉大な業績を残し、それらによって人間性の形成とその調和的完成を強調したシラー、また一七八九年以降二十年近く死にいたるまで、フンボルトの親友であり、フンボルトをして「私はシラーを非常に信頼した……彼はその精神や性格において非常に興味ある人である<sup>(6)</sup>」<sup>(6)</sup>といわせたシラーもまた、ドイツ的フマニズムに対する貢献者の一人であった。文学者であるとともに歴史家でもあった彼は、そうした立場からたえず人間の有する二元的なるものの解決を求めたのである。彼は人間の有する必然性 Notwendigkeit と自由 Freiheit との拮抗が人間の諸々の行為の動機であり、したがってまた歴史の動機でもあるとみたのである。そうして彼にとってはこれら二者の拮抗から生ずる自由の

勝利こそが、人間性にとつても世界歴史にとつても決定的な意義を持つものであった。さらに彼はこうした自由の概念を芸術に関連づけ、さきの人類の『美的教育に関する書簡』では、カントの倫理的自由との類比のもとで、真・善への感覚的要素としての美の重要性を強調した。たとえばカント的な倫理的國家 *der ethische Staat* と力学的國家 *der dynamische Staat* との対立は美的國家 *der aesthetische Staat* において止揚されると説く<sup>(7)</sup>などは、その好例であろう。

以上、われわれはドイツ的フマニスムスの代表者とみられる人びとについてそのスケッチを試みた。もちろんこれら主として文学の領域における人びと以外にも、たとえば、哲学の領域におけるライプニッツやカント、教育の領域におけるゲスネル、ヴォルフなどがあげられよう。ともかくもこうした人びとによってあたらしくドイツに生まれたフマニスムス—啓蒙主義にはじまりやがてその超克を旨ざすドイツ固有の精神運動としてのドイツ的フマニスムス、すなわち新人文主義運動—は、つぎにのべるヴィルヘルム・フォン・フンボルトにおいてその頂点に達したのである。そこで一応このフンボルトに言及するまえに、こうしたドイツ的フマニスムスの持つ二、三の特質を、ここにあげておくこととする。<sup>(8)</sup>

まず第一にそれは、人間の生に対する解釈において啓蒙主義の主知的で合理的な傾向とは異つていうことである。すでにわれわれはルソーにおいて、そうした新しい生の解釈に対する基本線ともいべきものをみるのであるが、それは人為に対する自然の勝利を、また知性に対する感性の優位を証明するものである。同時にまたそれは、カントにおいてみられるような、いわゆる実践理性の優位、悟性に対する意志の優位でもあった。要するにそれが、人間の知性のみ重点を置かず、むしろそうした知性を生み出すところのより根源的なものとしての感性や意志を強調したという点に、その特質の一つが指摘され得よう。ここからしてまた当然につきの特質である人間諸能力の調和

的發展の重視ということが生れてくるわけである。すでにこうした観点に立てばまた、かのカントの感性的なるものを理性の形式に従属させるところの、いわゆる嚴肅主義 *der Rigorismus* よりも、むしろ右のような人間の持つものもろの特性を調和的に發展させることが強調され、またいままではそれほど省みられなかった調和の契機としての美的なるものが強調されるようになったことも、けだし当然の事であろう。つぎに第三の特質としては、それが人間の自由を尊重する、いわゆる歴史的立場に立つということである。すなわち新人文主義者たちの尊重する個人とは、一定の時と場所において生成發展するところの歴史的存在であり、歴史においてはじめて個人の有する自由の發揮が可能となり、歴史によってはじめて個人は客観化せられるのである。要するにそれは、それ以前の個性観においてはみられなかったところの歴史という概念を色濃く導入して、人間の生成と發展とを基礎づけたのである。このようにしてドイツ的フマニスムスは、歴史的立場に立ちつつ、あげて個人における全人間の諸能力の調和的發展を自己の理想とした点にその特色があるといえよう。いま、こうした点でそのもっとも純粋な代表者とみられる者は、さきに触れたところのフンボルトである。そこでわれわれは、右にあげたような諸点と関連しつつ、つぎにフンボルトについて考究することとする。

- 註(1) T. Litt, *Technisches Denken und Menschliche Bildung*, (1957). S. 8.  
 (2) R. Haym, *W. v. Humboldt. Lebensbild und Charakteristik*, (1965). S. 3.  
 (3) K. Rossmann, *Deutsche Geschichtsphilosophie von Lessing bis Jaspers*, (1959). S. 30.  
 (4) R. Petsch, *Goethes Faust*, (1925). S. 480.  
 (5) J. P. Eckerman, *Gespräche mit Goethe*, (1948), Artemis-Verlag. 24, S. 470.  
 (6) S. Seidel, *Der Briefwechsel zwischen F. Schiller und W. v. Humboldt*, (1962). S. XI.  
 (7) F. Schiller, *F. Schiller sämtliche Werke*, V. (1959). S. 661 ff.  
 (8) いわゆるドイツ的フマニスムス第一期の特質である「古典についての関心」についてはここでは触れない。



## III

ハイน์リッヒ・バインシュトック H. Weinstock は「人間のだれもが持つ純粋な人間性を陶冶し形成することを人間の課題であると信ずることが、フマニズムである」<sup>(1)</sup>と語っているが、この言葉はまさに、これから考究しようとする、フンボルトの業績の性格を如実に表現していると思われるのである。フンボルトが数多く残した業績―しかも未完成のまま―の中で、もっとも多くそれらのテーマに使用している語句は「人間」という言葉である。曰く『人間諸能力発展の法則について』Über die Gesetze der Entwicklung der menschlichen Kräfte (1791)、『比較人間学草案』Plan einer vergleichenden Anthropologie (1795)、『人類の精神について』Über den Geist der Menschheit (1797) などである。さらにこうした傾向は、彼が晩年の言語研究においても同様である。曰く『人間の言語構造の種々相について』Über die Verschiedenheiten des menschlichen Sprachbaues (1827~1829) である。彼の『ある女友達への書簡』Briefe an eine Freundin として知られている一八二二年にシャルロッテ・デーデ C. Diede に宛てた書簡の中でも、彼は「人間にとって結局人間ほど興味深いものは、この世の中にはない」<sup>(2)</sup>と語っている。こうした人間への関心が早くから動機となって、彼の探究はもっぱら人間そのものへと向けられたのである。したがって、クレメンス・メンツェ C. Menze も語るように「倫理学・美学・人間学・歴史学・心理学・言語哲学・政治学などと、一見、異質的な多くの領域の中でその中心を見失うかのように見える彼の業績も、人間を中心として、さらにくわしくいうならば、人間の認識とその育成とを終局の目標に置いていたとみると、そこに大きな統一が得られるであろう。換言すれば、彼の生涯にわたる活動は、彼自身の人間学 Anthropologie を基礎づけ、それを実践することにあつた」<sup>(3)</sup>のである。

さらに彼の人間中心の見解を別の側面から、すなわち彼のさいしょの政治的著作である『フランス新憲法によって誘発された国家憲法に関する諸理念』 *Ideen über Staatsverfassung, durch die neue französische Constitution veranlasst* (1791) およびつぎの年に出版された『国家活動の限界を規定せんとする試論的考察』 *Ideen zu einem Versuch, die Gränzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen* (1792) から考察してみよう。彼は前の著作において「憲法制定国民議会は、理性のたんなる原理にしたがって、一つの全くあたらしい国家組織を作りあげようと企てた。……しかし理性がある計画されたプランにしたがって、いわば、さいしょから建てているような、いかなる国家制度も成功することは出来ない。より強力な偶然とそれに対抗する理性との闘争から生ずるような国家憲法のみが成功出来るのである。」<sup>(4)</sup> という。より強力な偶然とそれに対抗する理性との闘争を生み出すものは人間であり、それゆえに彼はまたいう「人間において成功しようとするものは、彼の内部から起らねばならぬ。外部から彼に与えられてはならない」<sup>(5)</sup> と。こうした考えは、後の著作においてますます明瞭となる。曰く「人間の真の目的は……彼の諸力をもっとも高度に、かつ、もっとも均斉あるように形づくって、一個の全体に到達せしめることであり、この形式のためには、自由こそが第一のそして必要欠くべからざる条件であり、そうした目的を達成するため、国家は出来るかぎり、その活動を制限し、すくなくとも市民の幸福安寧を促進するとか、外敵の防禦に当るとかを、その重要な任務とし、個人に出来るだけ多くの自由を与えるようにしなければならぬ」<sup>(6)</sup> と説いたのである。あきらかにフンボルトの国家政治思想は、何よりもまず人間の育成をその基礎においたものである。<sup>(7)</sup> ところでいまこのフンボルトの言葉の中で、われわれが注目すべき二つの点があるように思われる。その一つは、彼が国家に優先して人間を、しかも具体的個性を持った市民 *Bürger* ともいふべき人間の育成を強調したこと。いま一つは、そうした個人が自己の所有する個性を、いかにして全体的にしかも調和的に発展せしめるか？ ということに彼が配慮した点である。このこと

は、さらにこの時期に相前後して出された二、三の著作に詳説されているので、つぎにそれへと眼を転じてみよう。

「歴史が示すあらゆる像の中で、自分をとりまく生命なき自然や生き生きとした自然―人間はそれらのたえざる影響のもとで生きているのであるが―の状態が異なるにつれて、自己の生活の仕方を異にする人間の像ほど、広くまた強く注意を引くものはあるまい」<sup>(8)</sup>。この言葉は彼の『人間諸能力発展の法則について』の冒頭の言葉であり、同じように「あらゆる研究の中で、人間の研究ほど、大いにわれわれの不断の伴侶たるものはない」とは、彼の『比較人間学草案』の中に見出される言葉である<sup>(9)</sup>。まことにこの時期―一七九一年より一八〇一年にわたる十年間―における彼の思索の中心問題は「人間」の問題であり、しかもそれは、とくに右の『比較人間学草案』において詳説されるように、個々の人間の具体的な現実から出発して、それを後述するような陶冶理想によって、完全な人間性にまでまとめあげようとする試みであった。彼にとって課題となり、その思索の持続的対象であったものは、あくまでも生き生きとした、全体において活動する人間であり、決してばらばらに分解されて把握されるような抽象的な人間ではなかった。換言すれば、人間一般 *Menschen überhaupt* としての人間ではなく、その時その場所において現存する個人であった。したがってこうした個人は彼にとっては、人間という種族一般と結合しては、考慮に入らないのであって、いわば個性として、一人一人のかけがえのない個性として、はじめて考察の対象となるのである。そもそもこのようなそれ自らの中に完結する個性という概念は、すでにモンテーニュによってとりあげられ、哲学的には、ライプニッツやシャフベリーの思想においてもみられるものである。それ以来、先述のヘルダーやシラー、ことにゲーテにおいてますますその重要性がみとめられ、それがいまフンボルトにおいて決定的に重要な思索の対象となったのである。われわれはつぎに、右のような歴史的背景を持つ個性概念が、フンボルトにおいて、さらにどのように深められたかを考究する。

個性的人間とは、つねに彼が自己について一般に知り得る以上のものであり、この一般に知り得る以上のものこそ、人間にとって本質的なものであり、それゆえにまた、人間の自由の根拠ともなり得るものであると、フンボルトは仮定する。これは厳密な、またあらゆる意味で、人間認識の可能性を拒否したものである。さらに進んで彼は、このように人間の中に隠されてあり、人間の自己認識を不可能にするような不可解な力 *Kraft* ともいべきもの、いわば、概念によっては把握されず、感覚によってのみかろうじて測り得るようなこの力、この力こそが終局的に人間を規定するものであるとみたのである。力こそは彼にとってあらゆる存在者を存在者たらしめる根元であった。彼の見解にしたがえば、こうした根元的な力を予感し、仮定することは、あらゆる学問的研究にとつてもまた必要なのである。彼はつぎのように語るのである。「真の学問は、ある原動力―その本質は鏡に反映するように、ある根源的イデーの中に表現される―の予感によって透徹され、活気づけられねばならず、現象全体をこうした予感に結びつけなければならぬ」と。<sup>(10)</sup> さらにこのような力は、宇宙をまとめあげ、宇宙を自己に担うものである。ここに到っては彼の力の概念は、まさに形而上学的なものになったといひ得るであろう。さきの個性もまたここでは、こうした宇宙の根源力たる「力」の具体的な表現の一つ一つと解釈され得るのである。

この原動力、個人をはじめ一切の事物をつねにあたらしく生産し構成するこの原動力、―これこそまさに生と死とを区別するエネルギーともいえるのであるが―このエネルギーは、たえず内から外へと個人を駆り立て、自己の本性を強化し高尚にし、自己の本質に価値と継続とを与えようとするのである。<sup>(11)</sup> フンボルトはいう「人間の本性は、たえず自己から、自己の外部の諸対象に移るように、うながしてやまないものである」と。<sup>(12)</sup> しかしこのことが可能なためには一方において、われわれの自我が、ひたすら自己の本性の強化・高尚化をそれによって望み、自己の本質に価値と継続とを与えてくれることを願うところの対象が存在しなければならぬであろう。そうした対象が存在する

ゆえに「自己の認識および自己の活動範囲を拡大しようとする人間の努力は、そこから起り得るのである。」<sup>(14)</sup> ここでまた人間の本性にとって問題となることは、こうした外向的な努力の望ましい対象形態はいかにあるべきか、換言すれば、個人はいかにしてこの過程において自己自身を失うことなく、<sup>(14)</sup> 自己の外部に生起する一切の事物から、つねに明るい光明と慈悲深い温かさを、その内部へ反射し得るかということ、いま一つは、そうした望ましい外部的対象をどこに求めるかということである。右の二点に関してわれわれは、彼の論述の中で示唆深きつぎの言葉を見出すのである。すなわち、人間の本性の中には、能力としての一般的交互作用 *durchgängige Wechselwirkung* と「いま一つの完全な統一性 *vollkommene Einheit* とが存在する」という言表<sup>(15)</sup>である。

個性が自己の周辺にある一切のものを獲得しようとする場合、個性はまずそれを知的に獲得しようとする、と彼は考える。しかし、それはもちろんたんに知的であるのではない、このことをフンボルトは人間知 *Menschenkenntnis* を例にとって説明する。曰く「人間知とは、知的な、感情的な、また道徳的なさまざまな人間の諸力の知識、そうした諸力が互いに獲得するところの変容の知識、それらの正しいまた不正な状態のあり得る仕方に関する知識、それらに対する外部の状態の關係の知識、これらの力が、ある与えられた気分の中で不可避的に作用しなければならず、また決して作用し得ないようなものの知識、要するに、内部から作用した変化の必然性の法則と、外部から作用した変化の可能性に関する知識にほかならない」<sup>(16)</sup>と。したがってこうした知識はかならず存在しているし、またこの知識を獲得すべく人間は努力しなければならないと、彼は考えるのである。さいわい人間にはそれがために「同一の対象をさまざまな形態で、すなわち、ある時は悟性の概念として、ある時は構想力の譬喩として、またある時は、感官の直観として自己の考察の前に導くという幾多の能力があるのである。」<sup>(17)</sup>ここでフンボルトは、人間が知情意を包含する一切の精神力でもって、自己の周辺のものを受け入れるべきことを主張するのである。また、こうした知識は、つね

に彼が人間個性のもっとも望ましい在り方と考えるところの、人開諸能力の完全な統一性を得るためにも必要なのである。彼はいう「私はいままで人間をわざと、個々の活動に分けて考察してきた。しかしいかなる活動においても、私がここで語っている知識の不可欠なことは、つぎの事である。すなわち、個々の努力を一全体に、しかもまさしくもっとも高貴な目的、換言すれば、人間の最高のもっとも調和のとれた完成という目的の統一にまで統合するためには、こうした知識はとくに必要だということである」と。<sup>(48)</sup>

いまこのような知識の具体的な対象を、フンボルトはどこに求めたであろうか。いうまでもなく、それは古代のギリシヤ民族においてであった。彼はいう「古代国民というとき、私はここでもつばらギリシヤ人を、そしてギリシヤ人のもとでは、しばしばもつばらアテネ人と呼んでいるのである。ギリシヤ人の遺物は、その創造者のほとんどの痕跡をとどめている。もっとも著しいのは、文学上の遺物であり、これらの中では、まず言語が注意を引くのである。いかなる民族も、ギリシヤ人に独自であったほど、豊かな想像力を譬喩的に表現するにあたって容易にそれを所有していた民族はいないからである」と。<sup>(49)</sup>彼は古代ギリシヤ人において、彼の探究する人間性をもっとも豊かに、しかも純粹に完成されているとみたのである。彼にとってギリシヤ人は、たんに知的な好奇心の対象としてあらわれただけでなく、全人間の力をそこに結集して創作された偉大な民族として、したがってまた、全人間研究のための対象として出現したのであった。第一に、彼にとってこのように完全な人間性を表現しているとみられるギリシヤ人は、とくに個性的、したがって歴史的<sup>(50)</sup>でもあった。その知性、その単純素朴さ、その感情や想像力の豊かさにおいて、はるかに他の民族を凌駕したのであり、このことは、彼らの有する哲学、芸術、言語において、もっとも明瞭に了解せられるところである。第二に、とくにこの民族の有する美的感情と、それによる対立的なるものの統一の美事さである。すなわち、ギリシヤ民族においては、通常、対立的契機と考えられる肉体と精神、感覺的なるものと理念的なるものが、

彼らの有する美的意識によってみごとな調和的統一を保っていることである。こうした理由によって、フンボルトは、この民族の中にはじめて、彼が人間を可能なかぎり、多方面にしかも統一的に育成しようとする彼自身の陶冶理想の具現を、したがってまた彼が欲するような人間性の理念を見出し得たわけである。すなわち、われわれの個性は、右のようなギリシヤ民族との接触媒介によって、より拡大し、より完全なるものへ、より普遍的なるものへと自己を高め得るのである。

- 註(1) H. Weinstock, W. v. Humboldt, Auswahl und Einleitung von H. Weinstock, S. 7. (1957).
- (2) 小口優訳『教養への道』一、モダン日本社(昭和十七年)六三頁。
- (3) C. Menze, W. v. Humboldts Lehre und Bild von Menschen, S. 33. (1965).
- (4) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (H. v. A. Flitner und K. Giel. Stuttgart, (1960). (Über die Gesetze der Entwicklung der menschlichen Kräfte), S. 34. (1791).
- (5) Ditto, S. 36.
- (6) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (Ideen zu einem Versuch, die Grenzen der Wirksamkeit des Staats zu bestimmen), S. 64. (1792).
- (7) 右のような彼の国家観は、彼がシュタインの要請もたしがたく、一八〇九年、プロイセンの宗教教育長官に任ぜられた後は、次第に変化し、国家の重要性を是認するようになった。しかし後述するように、彼の終局の目標はどこまでも個人の完成にあったのである。
- (8) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (Über die Gesetze der Entwicklung der menschlichen Kräfte). S. 43. (1791).
- (9) Derselbe, Derselbe, (Plan einer vergleichenden Anthropologie). S. 305. (1795).
- (10) Derselbe, Derselbe, (Über die Bedingungen, unter denen Wissenschaft und Kunst in einem Volke gedeihen), S. 557. (1814).
- (11) この段階はシュプランガーが、彼の „W. v. Humboldt und die Humanitätsidee,“ (1909) の中で指摘した、フンボルト

トのつむゆる三段階' Individualität, Universalität, Totalität 中の第二段階にあたるであろう。

- (12) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (Theorie der Bildung des Menschen), S. 237. (1793).
- (13) Ditto, S. 235.
- (14) ここで個人と社会との連関における自己喪失の問題が出現するが、この際はしかし、外部からの強制によることなく、自我が積極的に、外なるものの一切を撰取して、自己の拡大をはかろうとするかぎり、自己喪失のおそれはないとみるのが適當であろう。フンボルトによれば、社会もまた自己完成のための契機であったのである。
- (15) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (Theorie der Bildung des Menschen), S. 237. (1793).
- (16) Derselbe, Derselbe, II. (Über das Studium des Alterthums, und des griechischen insbesondere), S. 2-3. (1793).
- (17) Derselbe, Derselbe, I. (Theorie der Bildung des Menschen), S. 238. (1793).
- (18) Derselbe, Derselbe, II. (Über das Studium des Alterthums, und des griechischen insbesondere), S. 6-7. (1793).
- (19) Ditto, S. 9-10.
- (20) 普遍的・合理的なるものだけでなく、特殊的、非合理的なるものをも、考慮するところに歴史的精神は生誕するとみる。

#### IV

右においてわれわれは、フンボルトの初期の著作を参照しつつ、人間性の本質としての個性がいかにして外部との接触媒介によって自己を拡大しつづけるかを概観した。いまこのようにして拡大しつづける個性は、それがたんなる拡大のみにとどまるならば、個性としての独自性はいつかは喪失してしまうであろう。個情はつぎに自己を拡大しつつこの拡大したるものを内に向って収斂しなければならぬ。すなわち、個性の最終目標である多様なものの統一へ、シュプリンガー E. Spranger の言葉を借りていえば、普遍性 Universalität から全体性 Totalität へと発展



しなければならぬのである。こうした過程を経て完成した個性、いや完成しつつある人間性の本質たる個性、これこそ彼が、人間育成への終局の目標としてとらえたものである。ところでこの多様なものの統一への道は、いかにして可能であろうか。われわれはここで、彼の『人類の精神について』に眼を転じよう。

彼はいう。「およそ人間から発する一切の偉大なることが、どうしても刻印づけられるような一つの特徴がある……そこへと実際に到達せんがためには、人間は二つの道をたどることが出来る。経験による道と理性による道とである」<sup>(1)</sup>。人間は経験による道においては、完成した人類の最良最高の概念を与えてくれるような個人<sup>(2)</sup>をば、また、人間個性のもろもろの本質を遺憾なく發揮しているそうした個人の集合としての民族<sup>(3)</sup>をばえらび出し、それらとの接触媒介によってはじめて、客観的に自己の人間性を完全に表現し得るものである。一方また人間は理性による道においては、「人間の努力の究極的目標および人間の判断の最高標準として、人間の本分が探究されねばならない。しかもこの自由な自発的な本質としての人間の本分は、彼自身の中にしか含まれていないのである。……もっとも偉大なる人間とは、人間の概念を極度に強くあらわしているような人物を指すのである」<sup>(4)</sup>と。かくして人間は主観的には、自己の内面へ立ち帰って、一つの理念のもとに、すなわち、多様なものの調和という、しかも最高の調和という理念のもとに、経験の道において獲得したる一切のものを、自己自身で統合しなければならぬのである。ところで、この統合の契機は何であろうか。それは端的にいつて美的感情Ⅱ美的直観である。曰く「ギリシャ人の心中では、肉体的美と精神の美とが、互に柔軟にとけ合っているため、いまでもかの融合の所産、たとえばプラトンにおける愛についての議論は、真に魅力的な満足を与えてくれるのである。肉体的なまた精神的な育成に対する慎重さは、ギリシャにおいて、非常にすぐれて美の理念によって導かれていた」<sup>(5)</sup>と。さらにこれにつづく箇所においてはより適確に、つぎのように語るのである。「さて、人間の完全性に関するなんらかの観念が、多面性と統一とをもたらすことが出

来るとすれば、それは美の概念 der Begriff der Schönheit および感性的美の表象 die Vorstellung der sinnlichen Schönheit から生ずる観念でなければならぬ」と。<sup>(6)</sup>

フンボルトの人間研究に相即してはじまった彼の個性観に対するわれわれの考察は、個性がもともと自己に所有するところの、エネルギーをその根源力として、個性から普遍性を経過して全体性へと高まる過程を素描した。この過程を彼は育成 Bildung における人間の陶冶理想として重視したのであった。もともと一八〇九年までは、一冊の教育書をも手にしなかったといわれるフンボルト、また彼の教育論ともみられる『人間育成論』 Theorie der Bildung des Menschen (1793) は分量も僅少であり、その論旨も中断してしまっているようにみえるそのフンボルト、こうしたフンボルトについてシュプランガーは、別の意味で in einem anderen Sinn、彼はまったく教育者そのものであるという。<sup>(7)</sup> もとよりシュプランガーもまた、彼の教育行政家としての手腕は、これを高く評価している。プロイセンの首都ベルリンにベルリン大学を創設し、宗教教育長官として、プロイセン国家の改革を立派になしとげた彼であるからには、シュプランガーたらずとも、その教育行政家としての力量は、当然に認められるであろう。またこの事とは別に、シュプランガーは、彼が全人教育という観点から、初等教育の段階をペスタロッチの精神で、高等教育の段階を新人文主義の理念で、大学教育を学問の有機的全体という哲学的理念にもとづいて改革しようとしたことにも、彼の大いなる功績を認めている。<sup>(8)</sup> にもかかわらず、シュプランガーが、とくに別の意味でという言葉でもって指摘する点は、フンボルトにおいては、内的な自己育成と完成とが、何にもまして重要な教育目標であったということである。<sup>(9)</sup> 換言すれば、フンボルトにとつての人間育成の最終目標は、自己完成 || 人間性の本質である個性の自己完成、にあったということである。すでにさきにのべたように、彼の広範囲にわたるもろもろの研究は、すべてこれ人間本質の研究という一点に集約せられるのであり、そこからして生じた人間育成の理想は、どこまでも多様なもの

の調和的統一による自己完成であった。したがってこの点で、彼の陶冶理想は、彼に先だつベスタロッチやゲーテとは好対象をなしているといひ得るであろう。<sup>(40)</sup>

われわれはさきにドイツ的フマニスムスは、フンボルトにおいて完成したといったが、このことはまた、いま右にのべたことからして当然に帰結され得ることである。いわゆる啓蒙思想によって人間の尊厳を、とりわけ人間個性の尊厳を自覚したドイツ的フマニスムスは、さきにのべた多くの文学者、哲学者、あるいは教育学者たちによって、しだいに広く深くその内容を拡大していったのである。その際、これらの人たちは、それぞれに自己の持つ人間観や世界観にもとづいて、人間個性の各方面を伸長すべく主張はしたが、それがいまだ、個性の全体的調和的な自己完成という、いわばドイツ的フマニスムスの究極目標にまでは、到達し得なかつたのである。それがいま右のようにして、フンボルトによって完成されたわけである。しかもそれがとりわけ美的な、すぐれてギリシヤ的な意味で美的な情緒によって統一完成されるに及んで、ドイツ的フマニスムスはその最高潮に達したのである。

まことにフンボルトは個性を重視した人であった。なるほど彼もまた、近代の教育思潮において理解されているような、個人と個人、あるいは個人と社会との間に働く相互作用の重要性は、じゅうぶんに認識していたし、事実また、晩年における彼の地位からしても、すなわち、宗教教育長官として、新しいプロイセンのために国家の教育監督権を強化すべき立場に立つたこと<sup>(41)</sup>からしても、いつまでも個性の育成のみに沈潜することを許されなかつたことも、じゅうぶんに推測され得るところである。しかしながらその責任の重大にもかかわらず、究極的に彼はどこまでも個性尊重の人であった。たとえば彼が宗教教育長官就任の翌年に著した『ベルリンにおける高等学術施設の内外組織について』*Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin* (1810)においてつぎのように語るのである。「国家は全体として、大学やアカデミーから、直接、国家に關係するようない

かなるものも要求してはならない。……したがってわれわれが大学と称するものは、国家におけるあらゆる形式から解放された人間の精神生活にほかならない。学問と研究に向う外部の閑暇と内部の努力にほかならない。国家といえどもこのような理念に忠実でなければならぬ」と。こうした言葉によっても、彼がいかに個性尊重の人であったかは、容易に了解し得るところである。しかもこのような個情尊重の理由は、個性こそが人間の本質＝人間性を表明するものであったからである。

しかしながらわれわれはまた、こうした彼のフマニズムが、その中に当然に胚胎するところの静的で美的で貴族的な、そうした意味でまた個人主義的な特質のために、やがてフマニズムのつぎの段階へとあらたなる発展をとげねばならなかったことも、見逃してはならないであろう。それにしても、すべての学問や文化が日ごとにその統一を失って分裂化していく現代、またあらゆる人びとの個性が、ともするとその集団化によって窒息を強いられようとする現代にとって、すでにこうした学問や文化の統一を強調し、人間性＝個性の尊厳を主張したフンボルトの見解は、これを高く評価せられてよいであろう。

註(1) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (H. v. A. Flitner und K. Giel, Stuttgart, (1960).  
(Über den Geist der Menschheit), S. 508-509. (1797).

(2) フンボルトにとってこの場合の個人とは端的にいって天才を意味するものである。彼は „Über den Geschlechtsunterschied und dessen Einfluss auf die organische Natur“ 1794, I. S. 274-275 にらびつじのゆゑに語つてゐる。「精神的な生産力は天才である。……天才は最高の客観性を自己の内部から創造することができる。あるいは天才はむしろ、彼自身の主観的偶然的な存在を必然的な存在に転化せざるを得ない」と。なお、フンボルトにとっては歴史をつくる者もこのような天才であった。

(3) すでにⅢにおいて述べたところのギリシヤ民族を指す。なほ、F. Schafstein, „W. v. Humboldt“ S. 98. にみれば、フ

ンボルトの生活内容を形成する一切の事柄は、これをギリシヤ人から受取ったとしている。

- (4) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, I. (Über den Geist der Menschheit), S. 514-515. (1797).
- (5) Derselbe, Derselbe, II. (Über das Studium des Altertums und des griechischen insbesondere, S. 14. (1793).
- (6) Ditto, S. 14.
- (7) E. Spranger, W. v. Humboldt und die Reform des Bildungswesens, (1960), S. 52.
- (8) Ditto, S. 15.
- (9) Ditto, S. 53.
- (10) ともに個性の尊厳から出発しながらも、ゲーテが晩年、社会的立場を重視し職業的陶冶を強調したことや、ペスタロッチが一般民衆の教育を主張した点で、フンボルトのこの立場は好対象をなしている。
- (11) フンボルトは一八〇九年一月、ニュタインの切なる要請により、内閣に入り、宗教教育長官となった。
- (12) W. v. Humboldt, W. v. Humboldts Ausgewählte Schriften, IV. (Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin), S. 260. (1810).

## V

人間性の本質が個性にあり、このような個性は、個別性から普遍性を経て全体性にいたって完成するというのが、フンボルトにおける人間性の理念であった。このような彼の見解はまた早くから彼の興味の対象であった言語 *Sprache* の研究においても、その研究過程や業績の中にあらわれているのである。すなわち、彼の言語研究に一大転期をもたらしたとみられる一七九九年のスペイン旅行から、一八三五年の死の直前にいたるまでの三十五年間におよぶその言語活動の中で、言語研究の個別期は前半の約二十年であり、普遍性から全体制へとわたる時期は後半の十五年であつ

た。この後半の時期において彼の言語研究は、しだいに言語の哲学的研究へと変容していったのである。

つぎに彼のこの領域での業績の重要なものを挙げると、彼の研究の個別性を劃するとみられる二度のスペイン旅行の収獲であるバスク語の研究がある。その中で『バスク語によるヒスパニア原住民についての研究試案』 Prüfung der Untersuchungen über die Urbewohner Hispaniens vermittelt der vaskischen Sprache (1820~1821) は見落せないであろう。ついで彼の言語研究の方向を決定づけたものに、一八二〇年、ベルリンのアカデミーにおいて発表した『言語発展の様々な時期に関する比較言語研究について』 Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung (1820) がある。この時期に、彼はその他にかなりの著作を発表したが、中でもその翌年と翌々年に発表した『史家の課題について』 Über die Aufgabe des Geschichtschreibers (1821) と、『文法形式の発生とその理念の発展におよぼす影響について』 Über das Entstehen der grammatischen Formen und ihren Einfluss auf die Ideenentwicklung (1822) が重要である。彼の完成期における言語研究の代表作として挙げるべきものには、彼の死去の翌年に刊行された『ジャヴァ島におけるカーヴィ語について』 Über die Kawi-Sprache の序説である『人間的言語構造の相違性とその人類の精神的発展におよぼす影響について』 Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts (1836) があり、彼の言語研究の一切がここに完結されているといえるであろう。もっとも右に挙げた著作のほかにも、前掲の人間研究に関するいくつかの著作や、彼がローマ教皇庁のプロイセン公使時代に研究した『ローマとギリシヤ、別題、古典的古代の考察』 Latium und Hellas oder Betrachtungen über das klassische Altertum (1806) などにも、いたるところに彼の言語論がみとめられるからして、言語に関する彼の興味は人間に対するそれと同様、終生、彼の身边から離れなかったといひ得るのである。

フンボルトは言語と人間との関係を全く相即的に考えていた。曰く「言語は人間そのものに属し、人間の本質以外には決して源泉を有しない。……言語が人間に働きかけるといわれるならば、それは、人間が言語にしています。広い範囲にますますいろいろな仕方、しだいに自覚的になることをいうにすぎない」と。(2) こういう意味の表現は、彼の著作のあちこちに散見されるのであり、いわば、彼はこのような根本的見解のもとに、人間理解の根底となるところのより一般的なるものを言語において見出したのである。いまや言語はフンボルトにとっては個性理解の本質的な基準 *Kriterium* として存在するのである。ところでこの場合の人間は、あくまでも前述のような個性を持ち具体性を具備した人間であった。右につづいて彼はいう「言語がこのように人間と同一視されるならば、その人間というのは、たんに普遍的、形而上的に考えられた人間ではなく、むしろ現実に存在し生活し、現在の世界のさまざまな地域的、歴史的関係において制約された人間であり……」(2) と。それでは世界のさまざまな地域または歴史的関係において制約された人間とは何であろうか。彼はこれを通常せまく考えられるような個人や、個人の属する国民や世代だけに限らず、むしろ言語によって個人と結びついてきたあらゆる民族や、あらゆる過去の人類をも考えていたのである。その理由は、彼が言語の持つ内外の二面性をしっかりと把握していたからである。

フンボルトは、言語の有する内と外との二面性をするどく洞察していた。言語は一方で人間の個性と結びつくもつとも個性的な表現であるとともに、他方では、自己と他者との一般的な理解の可能性を包含するものである。この意味で言語は、自然と人間、個人と個人、個人と国民、個人と人類とを接合する媒介の役割を果すものである。彼はいう「しかし言語は個人の自由な産物ではなく、つねに全国民の所有物である。後の世代はこの全国民の中で前代の人びとから言語を受けとる。すべての個人や身分や性格や精神の相違などの考え方が、言語の中で混合し改造されることによつて、言語は主観から客観への、つねに狭い個性から一切を同時に自己のうちに包摂する存在への、大きな推

移点となる<sup>(3)</sup>と。このようにして言語は、個別性をもって全体性へと高まろうとするところの人間性の発展を、庇護し助長し媒介するものとなるのであるが、ここにいたっては、言語はたんに個性理解の本質的な基準にとどまらず、そのような個性と国民性とを、あるいは個性と人類全体とを、その全体性において成立可能にし、また理解可能にするような基準として存在するものなのである。

ところでこのような言語は、いかにして形成されるのであろうか。彼によれば、言語はたんに人間の社会的要求によって起った一種の技術的な発明といったものではなくて、人間の本質的なもつとも深い啓示なのである。言語は一国民が一つの個性を持つように一つの精神的個性であり、生命的な働きの力であり、活動である。彼はいう「言語そのものはエルゴン Ergon ではなくて エネルゲイア Energeia である」Sie selbst ist kein Werk (Ergen), sondern eine Tätigkeit (Energeia)<sup>(4)</sup>。いうところの意味は、言語は死んだ産出物ではなくて、むしろ産出する活動とみなければならないということである。その際人間は、人間の持つ諸能力を全体的に統合し得てはじめて、右のような意味での言語活動をなすことが可能となるのである。言語活動はつねに全人間性の表現・表出であり、人間精神の必然的発露であるからである。

右に言語が生きた人間性の全産出活動であるという、人間存在と相即するフンボルトの言語観を略述した。しかしなに分ばう大な彼の言語研究をわずかな数例によって論述することは、とうてい不可能である。またいうまでもなく、彼の言語研究にも、その言語観において年とともに大いなる変容と展開がみられるからして、さらに稿をあらため、彼の言語哲学的研究に焦点をあわせて考究することとする。

註(1) H. v. A. Leitzmann, W. v. Humboldts Gesammelte Schriften, 1905, 6, 120. (Über die Verschiedenheiten des menschlichen Sprachbaues). (1827-1829).



- ② Ditto, S. 120-121.
- ③ Derselbe, 4, S. 24. (Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen des Sprachentwicklung). (1820).
- ④ Derselbe, 7, S. 46. (Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts). (1836).